

朝阳北塔在东亚佛寺布局演变序列中的地位

郭大顺

1988年笔者在日本作文物考察时，曾参观过多处佛寺及佛寺遗址，对日本古代佛寺特别是对隋唐及此前早期佛寺整体布局的考古发掘、复原和展示渐有印象。在参观国立奈良博物馆时，正好该馆在举办一个佛教展览，我曾就日本古代塔寺布局询问过井口喜晴室长。他送我一份日本飞鸟时代到奈良时代佛寺平面布局演变图。几天后拜访关西大学网干善教教授，他又送我一本他的新作——《飞鸟发掘》，书中有朝鲜半岛和日本列岛早期佛寺布局图多例，可以看出由北(朝鲜半岛)向南(日本列岛)发展演变的一些规律^[1]。此后，又听《文物》月刊编辑部李力同志说，宿白先生对古代佛寺布局很重视。我又读到徐莘芳先生《开封大相国寺图说》一文^[2]，文中引用大量隋唐前后佛寺布局材料，但多是日本的例子，中国的最早实例只有大同善化寺，那已是辽金时代了。这段经历引起了我对中国古代佛寺布局特别是早期佛寺布局的注意。

此前的1984年，配合义县奉国寺大殿维修，当地政府部门将现奉国寺庙前作了大面积动迁，这为通过考古发掘验证该寺院辽金碑刻所记辽代奉国寺建筑组合和布局提供了有利条件。为此，笔者多次建议参加奉国寺维修工程的王晶辰(省文化厅文物处)和吴鹏(义县文物管理所)同志，在奉国寺维修过程中插空做些考古发掘工作。虽然奉国寺庙前由于历年有人居住，且甚密集，地下扰乱很重，但仍在寺院西部和南部距地表3米以下的深处，找到了辽代奉国寺诸多建筑的礅墩部分，这就为了解辽代奉国寺的布局提供了实物证据，包括山门、回廊，特别是回廊与配殿相结合(即由唐代的回廊与两侧建筑不相结合到明清时期的东西两厢的过渡阶段)等具时代特点的布局等。不过，这已是隋唐以后的实例了。

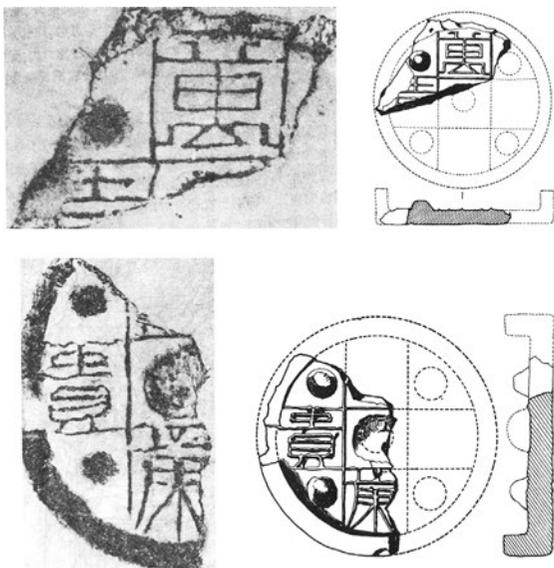
真正与隋唐及之前的早期佛寺布局联系起来的是朝阳北塔。就在奉国寺维修工程开始不久，朝阳北塔的维修也着手筹备工作，在制订维修方案时，大家一致同意将北塔地上建筑的维修与地下考古发掘结合起来^[3]。其成果十分可喜，一是在地上部分探察清楚、保留并局部展示出唐塔与辽代的两个阶段共三个时期层层包砌的年代关系，一是找到北魏木塔的塔基部分以及压在其下的十六国三燕时期的夯土台基，这就以确凿的实物资料证明，朝阳北塔就是史载北魏冯太后在故燕国都城龙城所建“思燕佛图”^[4]。但因为当时北塔周围被工厂、居民区所包围，无法扩大发掘面积，有关北塔所在寺院布局的材料所知甚少，但在北塔东部约40米处勘探出“富贵万岁”瓦当等三燕至北魏时期文物和遗迹线索，为继续寻找北塔寺院的围墙等遗迹保留了一线希望(图一)。据记载，朝阳北塔始建于5世纪后半期，要早于洛阳永宁寺的建造年代(6世纪初)，是中国目前所知佛寺遗址中较早的一例。于是，寻找北魏时期

朝阳北塔寺院布局就列为辽西考古的一个重要课题，自然也成为此后在朝阳老城区进行考古勘探的主要目标之一。巧的是，2003—2004年，朝阳北大街改造工程将北塔周边全部动迁，这又是一个极难得的机会。在大家的宣传和推动下，开始了寻找北塔寺院整体布局的考古发掘。虽然城建留给考古发掘的时间极为有限，最后的结果远不如期望，但在北塔的东、西、北三面都找到了寺院围墙墙基的线索，在北塔正北约10米处还发现了夯土台基（可惜已来不及正式发掘，因新建的北塔博物馆竟然就建在这座夯土台基

之上），可以基本勾画出一个北塔寺院的平面布局图，是与洛阳永宁寺相近的塔的位置近乎位于寺院中心的布局(图二)^[5]。

关于洛阳永宁寺，这座北魏国寺在20世纪80年代以来由中国社会科学院考古研究所进行过多次勘探和系统发掘，是北方地区考古工作做得较多也较为全面的一个佛寺遗址。尤其是在发掘塔基之后，通过勘探和试掘，找到包括寺院围墙、山门在内的多处建筑遗迹，所得永宁寺寺院布局平面图是当时“获得的第一张北魏乃至整个南北朝时期辟地新建类佛寺的寺院布局图”，自然较为准确翔实。特别是长方形院落内位于中轴线上的佛塔地位高于佛殿，成为朝阳北塔寺院布局的重要参照^[6]。

能够更为直接印证朝阳北塔寺院布局的，是最近发表的山西大同北魏方山“思远佛寺”遗址的考古发掘资料。因为“思远佛寺”建于北魏文明太皇太后冯氏陵园中，始建年代为北魏太和三年(479)，与朝阳北塔的建筑年代十分接近，而且都与冯氏太后有着密切关系，尤其是从塔的总体结构上比较，虽然“思远佛寺”建于西寺梁山南麓二级阶地的山坡地上，是与陵园有关的建筑，但寺院以塔为中心的整体平面布局，特别是有环实体塔心的殿堂式回廊结构，与朝阳北塔几乎完全相同(图三)^[7]。不同的是，朝阳北塔建筑于三燕龙城宫殿址之上，规模相对较大(“思远佛寺”的塔心实体南北残长12.05米、东西残长12.20米，小于朝阳北塔塔心实体以外圈柱网中心为标准计算的长宽各18.90米；“思远佛寺”环塔心殿堂式回廊每边长18.20米，面阔五间，小于朝阳北塔环塔四周殿堂遗址宽48.60米，面阔11间的规模)。尤其要提到的是，朝阳北塔位置又在靠近东北亚的辽西地区，与朝鲜半岛和日本列岛佛寺布局的关系更



图一 朝阳北塔东40米处勘探出土三燕至北魏“富贵万岁”瓦当残件

为密切。

前述朝鲜半岛和日本列岛诸佛寺布局的演变规律，概括而言，在于塔与佛殿在寺院布局中相对位置的变化，塔的位置渐由主而次，而佛殿的位置则由次而逐渐取代塔占据了寺院的主要位置。其具体演变过程在以下诸实例中有较为典型的反映(图四)^[8]。

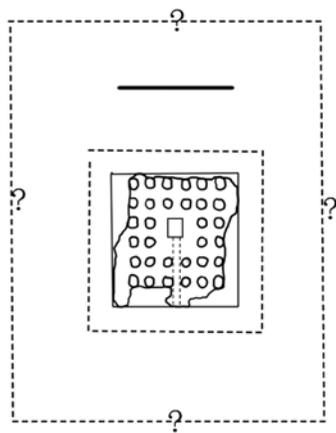
平壤清岩里废寺。位于大同江北岸的清岩里高句丽土城南部，1938年发掘。该寺建于498年，晚于朝阳北塔十余年，具有从南到北为中门、八角殿塔和中金堂的南北中轴线，形成塔近中心，塔后有中金堂，塔的东、西仍各有一金堂，是一塔三金堂的布局，与20世纪50年代发掘的日本飞鸟寺一塔三金堂的组合相近，但年代要早近百年。显示佛殿出现后，塔仍占据着中心位置。是处于与朝阳北塔、大同思远佛寺以及洛阳永宁寺相近的发展阶段。

忠清南道军守里废寺。位于今忠清南道扶余郡，是百济扶余宫城南部的—座寺院，建于538年。基本布局为塔与塔前中门、塔后中金堂、北讲堂处于南北轴线上，金堂位置渐近中心，而塔的位置明显靠前(南)，逐渐离开中心地位，显示塔殿地位开始发生较大变化，从而代表了这一演变过程中的又一阶段。

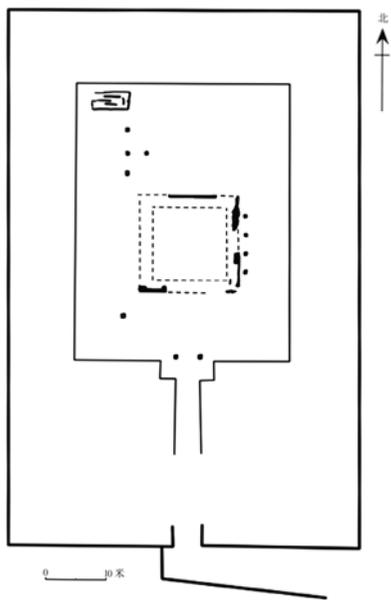
奈良飞鸟寺遗址。建于588年。1954—1956年发掘。为塔与塔前(南)中门、南门，塔后(北)中金堂、北讲堂处于南北轴线，寺院中心渐由塔向佛殿转移的布局，但塔的左、右仍有东、西金堂，显示塔的中心位置仍然得到部分保留。

大阪四天王寺遗址(图五)，建于593年。保持着这一阶段南门、中门、塔、金堂、讲堂处于寺院中轴线的布局，但塔移前，寺院中心渐由塔向佛殿转移。

奈良川原寺遗址和法隆寺(图六)。分别建于655年和607年(法隆寺现存地上建筑及布局为670年焚后重建)，这两座寺院布局的一个重大变化是，塔位于寺院中门以内的前院，且与西金堂东、西并立，离开了寺院布局的南北中轴线，而中金堂位在寺院最中心，形成由中门直

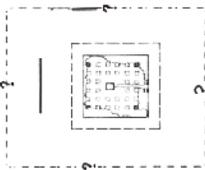


图二 朝阳北塔的北魏塔基与寺院布局平面图(约公元480年)

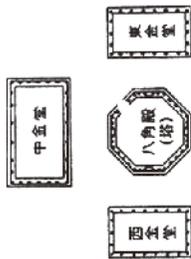


图三 大同“思远佛寺”布局平面图(479年)

5 世纪后 - 6 世纪初 (塔近中心)



朝阳北塔 (约480年)

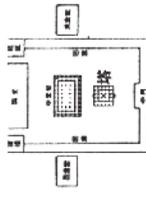


平壤清岩里废寺 (498年)

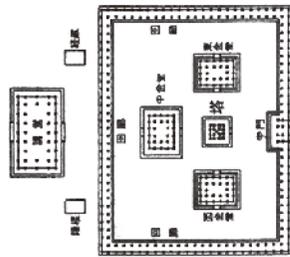


洛阳永宁寺 (516年)

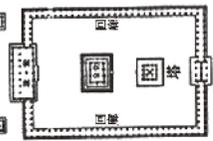
6 世纪中 - 末 (塔移前)



韩国忠清南道扶余军守里废寺 (538年)

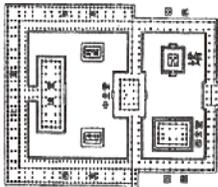


日本奈良飞鸟寺 (588年)

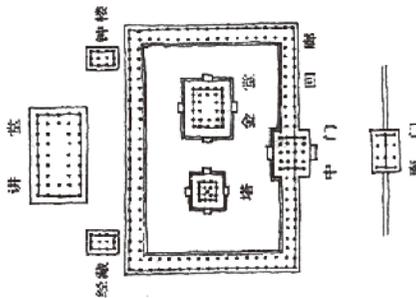


日本大阪四天王寺 (593年)

7 世纪中 - 后 (塔与佛殿东西并立)

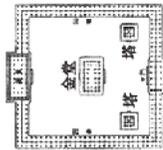


日本奈良川原寺 (公元655年)



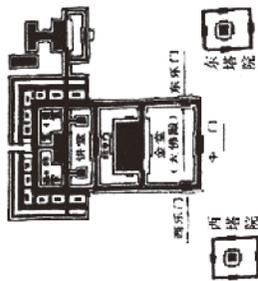
日本奈良法隆寺 (607 - 670年焚后)

7 世纪末 (佛殿居中, 东西双塔)



日本奈良药师寺 (697年)

8 世纪中 (双塔移中门外, 加塔院)



日本奈良东大寺 (745年)

图四 5—8 世纪中国、朝鲜半岛与日本佛寺布局演变图

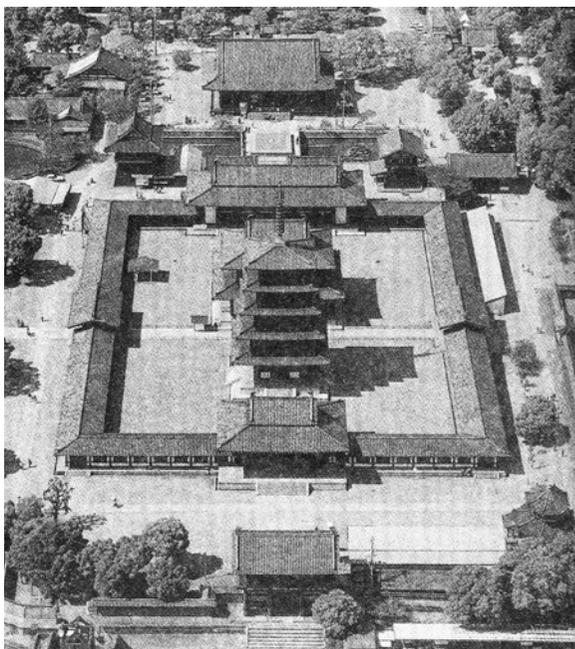
接到中金堂到讲堂的南北轴线，显示塔的地位进一步降低，而佛殿则已有占据寺院的中心位置的演变趋势，是东亚佛寺布局演变的又一关键阶段，也是塔殿地位变化更为显著的一个阶段。

奈良药师寺。建于697年。为双塔，而且都已移于寺院中门内前院的两旁，在寺院中处于显著的附属位置，而佛殿则已完全占据了寺院的中心地位，塔殿地位的转化到这时已基本完成。

奈良东大寺。建于745年。佛殿是寺院中心建筑，也有双塔，但双塔更进一步移至寺院中门以外，南大门以内，并另立东西塔院，是为塔与殿地位变化的延续。

以上诸例所排出的朝鲜半岛和日本列岛佛寺布局演变序列可以明确分为：5世纪后至6世纪初(塔近中心，佛殿在北)，6世纪中至6世纪末(塔离开中心，移前)，7世纪中至7世纪后(塔与佛殿东西并立)，7世纪末及以后(东西双塔到塔移寺院外，另立塔院)共四个阶段。如果在此基础上，将朝阳北塔、大同思远佛寺和洛阳永宁寺等

中国北方三寺依年代次序排列进去，可以得出一个更为系统的东亚佛寺布局演变阶段图，即仍可分作四个阶段，但第一阶段因有中国北方三寺资料，不仅内容更为充实，从中对塔近中心到塔与佛殿并立再到佛殿渐近中心而塔的地位变为次要，甚至移至寺院以外的塔院内的演变规律看得更为清楚，而且将第一阶段佛寺的时代提早到5世纪后半期，地区也是从中国的北方开始，经中国东北导向东北亚地区。由于这一演变反映的中心内容是礼拜对象的转变，即由对塔为主要礼拜对象为主到以殿和佛像的礼拜为主，可以认为，这是佛教传入中国以及



图五 日本大阪四天王寺



图六 日本奈良法隆寺

东北亚以后一个十分重要的阶段性变化。这就涉及东亚佛教一个重大的课题，那就是佛教的东传。

永宁寺发掘报告在评价该寺院布局考古发掘成果的学术价值和巨大影响时，已触及该寺院布局在东亚佛寺布局演变过程中的地位以至佛教东传中的重要作用：“如果放眼世界，还能从朝鲜半岛和日本列岛的早期佛寺遗址上，看到永宁寺这类寺院布局的某些影子。”^[9]

关于佛教由中国大陆向朝鲜半岛和日本列岛的传播，一般以为可以分为南北两路。论证南路的较多，而北路较少。北路东传的证据，早期实例除朝阳北塔以外，还有较早的北燕冯素弗墓所出的一件佛像纹步摇金铛，时代在5世纪上半叶^[10]。义县万佛堂石窟现存大佛与日本奈良飞鸟寺大佛在作风上的相近，也常被作为其间关系的证据，然而那已到6世纪以后了^[11]。而文献记载佛教向东传入高句丽是在4世纪后半叶（372年“秦王苻坚遣使及浮屠顺道，送佛像经文”为佛教传入高句丽之始）。不过辽阳上王家两晋之际壁画墓中有佛教装饰题材——莲花，墓前室四壁用四行石板抹角叠砌，中间形成方形天井的室顶，其具体时间以墓顶结构相同、壁画内容相近而有纪年的朝鲜黄海南道安岳郡东安岳3号墓（357年）为准，约在4世纪中叶，早于文献记载佛教传入高句丽数十年^[12]。而安岳三号墓错迭方形石块式藻井式墓顶和藻井上彩绘莲座以及莲花、舒叶等边饰花纹等较多的莲花装饰，是迄今佛教传入高句丽的最早证据^[13]。从辽阳上王家两晋之际墓到东岳三号墓的佛教题材，正是佛教东传的更早线索。

从以上所论可知，佛教的东传确有经北路相传的一支，具体途径是经辽西、辽东到达高句丽，再向南传播的。佛寺布局中塔殿位置变化由于反映了礼拜对象的转变，而且演变序列较为系统，应是佛教东传过程的一条主线。朝阳北塔在这一佛寺布局系统演变序列中排在前列，是佛教由北路东传的一个主要环节和重要实证。正如宿白先生所言：“辽宁朝阳发现的5世纪后期兴建的思燕佛图，是现知距离高句丽最近的一处以塔为中心的佛寺。”^[14]可见，在东北亚佛寺布局先后演变序列进而在佛教东传过程中的关键地位，是为朝阳北塔最为重要的学术价值之一。

（原载于《辽宁省博物馆馆刊》第三辑，2009年）

注

[1] 网干善教：《飞鸟发掘——成果と展望》，（日）駈々堂出版株式会社，1988年。

[2] 徐苹芳：《开封大相国寺图说》，《文物与考古论集》，第357—369页，文物出版社，1987年。

[3] 郭大顺：《古建筑维修的一个薄弱环节》，《中国文物报》，1996年2月4日。

[4] 朝阳市北塔考古勘察队等：《朝阳北塔1986—1989年考古勘察纪要》，《辽海文物学刊》，1990年第2期；张剑波等：《朝阳北塔的结构勘察与修建历史》，《文物》，1992年第7期。

[5] 辽宁省文物考古研究所、朝阳市北塔博物馆编：《朝阳北塔——考古发掘与维修工程报告》，第133页，文物出版社，2007年。

[6] 中国社会科学院考古研究所著：《北魏洛阳永宁寺——1979—1994年考古发掘报告》第138页，中国大

百科全书出版社, 1996年。

- [7] 大同市博物馆:《大同北魏方山思远佛寺遗址发掘报告》,《文物》,2007年第4期。
- [8] 以下佛寺布局平面图参见:网干善教:《飞鸟发掘——成果と展望》,第111—114页,駸々堂出版株式会社,1988年;徐莘芳:《开封大相国寺图说》,《文物与考古论集》,第365页图五、六,第367页图九,文物出版社,1987年。
- [9] 同注[6],第155页。
- [10] 黎瑶渤:《辽宁北票县西官营子北燕冯素弗墓》,《文物》,1973年第3期。
- [11] 刘建华:《义县万佛堂石窟》,科学出版社,2001年。
- [12] 李庆发:《辽阳上王家晋代壁画墓清理简报》,《文物》,1959年第7期;洪晴玉:《关于冬寿墓的发现和研究》,《考古》,1959年第1期。
- [13] 宿白:《朝鲜安岳所发现的冬寿墓》,《文物参考资料》,1952年第1期。
- [14] 宿白:《在“渤海文化研讨会”上的发言》,《北方文物》,1997年第1期。

東アジア仏教寺院の伽藍配置の変遷における 朝陽北塔の位置づけ

郭大順

1988年に筆者が日本で文物調査をおこなった際、多くの仏教寺院や寺院遺跡を参観したが、日本古代寺院、とりわけ隋唐代ないしそれ以前の初期寺院の伽藍全体の配置の発掘と復元、展示が印象に残った。奈良国立博物館を参観した折、同館ではちょうど仏教の展覧会が開催されており、筆者は日本古代の仏塔の配置について井口喜晴考古室長（当時）にうかがった。すると氏は日本の飛鳥時代から奈良時代に至る寺院の平面配置の変遷図をくださった。数日後、関西大学の網干善教教授を訪ねると、氏は新著『飛鳥発掘』をくださった。同書には朝鮮半島と日本列島における初期寺院の伽藍配置図が多く掲載されており、北（朝鮮半島）から南（日本列島）へと発展、変化していく法則をみてとることができた⁽¹⁾。その後、『文物』月刊編集部の李力氏より、宿白先生が古代寺院の伽藍配置を大変重視していることを聞いた。また徐萃芳先生の「開封大相国寺図説」を拝読した⁽²⁾。同論考には隋唐前後の寺院の伽藍配置に関する多数の資料が引用されていたが、多くは日本の事例であり、中国でもっとも古い事例は大同市善化寺、すなわち遼金代のものであった。このような経緯から、筆者は中国古代寺院の伽藍配置、とくに初期仏教寺院の伽藍配置に注目するようになった。

それに先立つ1984年、義県奉国寺大殿の修繕にあたり、現地の政府は現在の奉国寺の大部分を移動させることにした。これは遼金代の碑文に記された遼代奉国寺の建築構成と配置を考古学的な発掘調査によって検証するうえで、実に幸いなことであった。そのため筆者は、奉国寺の修繕に参加した王晶辰氏（遼寧省文化庁文物処）と呉鵬氏（義県文物管理所）に幾度も提言し、奉国寺の修繕中に発掘調査をおこなう機会を得た。奉国寺には以前から人が居住しており、かつ居住域が密集していたため地下は大きく攪乱されていたものの、寺院西部と南部では、地下3 m以下の深部から遼代奉国寺にかかる多くの建造物の礎石が発見された。これらは遼代奉国寺の伽藍配置を理解するための実証資料であり、山門や回廊のほか、回廊とその左右の配殿の取り付け等（これは唐代における回廊と両側の建物が連結しない配置から明清時代の東西両房へと変化する、過渡的段階を示す）、遼代の特徴を示す配置が含まれていた。しかしながら、これも隋唐以降の実例にすぎなかった。

隋唐およびそれ以前の初期寺院の伽藍配置との関係性をまさに示すのが朝陽北塔である。奉国寺の修繕が開始されてまもなく、朝陽北塔の修繕もまた着手された。修繕方法の決定にあたり、北塔の地上部の建築の修繕と地下の発掘調査を同時に行うことに全員が同意し

た⁽³⁾。その成果は実に喜ばしいものであった。ひとつは、地上建築部の調査において、唐代の塔と遼代の塔が三段階にわたって姿をとどめており、局所的にこれを検出することで、各層が重複して包み込まれるように構築された計3期におよぶ時期的関係をあきらかにできた点である。もうひとつは、北魏木塔の基壇ならびにその下にある十六国三燕期の版築基壇を発見したことである。このようなきわめて確実な実物資料にもとづき、朝陽北塔は、史料にみえる北魏馮太后が故燕国の都城・龍城に建立した「思燕仏図」であることが証明された⁽⁴⁾。ただし、調査時の北塔は周囲を工場や住民区に囲まれていたため発掘範囲を拡張することはできず、また北塔が存在した寺院の配置に関する検討材料もほとんど知られていなかった。しかしながら、北塔から東へ約40mの地点では、「富貴万歳」瓦等の三燕から北魏に至る遺物や遺構の手がかりが発見されており、北塔寺院を囲む牆壁等の遺構の調査の継続に一筋の希望が残る(図一)。史料によれば、朝陽北塔は5世紀後半に造営が開始され、洛陽永寧寺の造営年代(6世紀初め)に先行する。目下、中国における仏教寺院遺跡のなかでも古い時期の一例である。それゆえ、北魏代の朝陽北塔の伽藍配置は遼西考古学の重要課題のひとつであり、もちろん今後の朝陽老城区における考古学的調査の主要な目標のひとつでもある。奇遇にも、2003年から2004年に朝陽北大街のつくり替えに際して北塔周辺の建物はすべて移動することとなり、これもまた得難い機会であった。各位の宣伝と促進のもと、北塔寺院の全体配置を探る発掘調査が開始された。発掘調査のために都市建設を中断できる時間は大変限られており、期待したほどの結果は得られなかったが、北塔の東・西・北の三面に寺院を囲む牆壁の基礎の手がかりを発見したほか、北塔の正北約10mの地点に版築基壇を発見し、北塔寺院の基本的な平面配置図を描くことができた(新設の北塔博物館がこの版築基壇の上に建設されていたため、残念ながら正式な発掘はできなかった)。その平面配置は洛陽永寧寺に類似し、塔が寺院のほぼ中心に位置するものであった(図二)⁽⁵⁾。

北魏の国寺である洛陽永寧寺については、1980年代より中国社会科学院考古研究所が複数回にわたって探査と系統的な発掘を実施しており、北方地区において考古学的調査が比較的多く、また全面的に調査がおこなわれた寺院遺跡のひとつである。とくに塔基壇の発掘後、探査と試掘調査によって寺院周囲の牆壁や山門内側の多くの建築遺構が発見された。永寧寺の伽藍配置は当時、「初めて得られた北魏ないし南北朝期に新設された寺院の伽藍配置図」であり、的確かつ詳細であった。とりわけ、長方形の回廊で囲まれた区画内の中軸線上に位置する塔は仏殿よりも地位が高く、朝陽北塔の伽藍配置の重要な参考になる⁽⁶⁾。

朝陽北塔の伽藍配置をより直接的に裏付けるのが、近年報告された山西省大同市の北魏方山「思遠仏寺」遺跡の発掘資料である。「思遠仏寺」は北魏の太和三年(479)に、北魏の文明太皇太后馮氏の陵園内において造営が開始されており、朝陽北塔と時期的に近く、

かつ両者ともに馮氏太后と密接な関係にあるからである。とくに塔の全体的な構造を比較すると、「思遠仏寺」は西寺梁山南麓の二級段丘の斜面に営まれた陵園にかかわる建築ではあるものの、塔を中心とした平面配置を示し、塔の周囲を殿堂式回廊がめぐる点で朝陽北塔と完全に一致する(図三)⁽⁷⁾。相違点としては、朝陽北塔が三燕の龍城の宮殿跡の上につくられ、規模が相対的に大きいことである(「思遠仏寺」の塔心実体は南北方向の現存長12.05m、東西方向の現存長12.2mで、外圍の柱並びの中心を基準に計算した朝陽北塔の塔心実体の一辺の長さ18.9mより小さい。また「思遠仏寺」の塔周囲をめぐる殿堂式回廊は各辺の長さが18.2mの桁行五間で、これは長さ48.6m、桁行十一間の朝陽北塔周囲の殿堂遺構よりも小規模である)。さらに特筆すべきは、朝陽北塔は東北アジアのなかでも遼西地区に近く、朝鮮半島と日本列島における寺院の伽藍配置との関連性がより密接なことである。

先述した朝鮮半島と日本列島の諸寺院の伽藍配置にみられる変化の法則とは、簡単にいえば、伽藍配置における塔と仏殿の位置関係の変化にある。塔は主体的な位置から従属的な位置へと次第に変化する一方、仏殿は塔に代わって伽藍の主要位置を占めるようになる。その具体的な変化は以下の諸例に典型的にあらわれている(図四)⁽⁸⁾。

平壤清岩里廢寺は大同江北岸の清岩里高句麗土城南部に位置し、1938年に発掘された。同寺は498年に建立され、朝陽北塔より十余年遅れる。南から北に向かって中門、八角殿塔、中金堂が中軸線をなし、塔は伽藍の中心近くに位置する。塔後方に中金堂、塔の東西にそれぞれ金堂があり、一塔三金堂の配置をなす。一塔三金堂の組み合わせは1950年代に発掘された日本の飛鳥寺に類似するが、それよりも時期は100年近く古い。仏殿の登場後も、依然として塔が伽藍の中心的位置を占めていたことを示している。同寺は朝陽北塔および大同思遠仏寺、洛陽永寧寺と近い発展段階に位置づけられる。

忠清南道扶余軍守里廢寺は、現在の忠清南道扶余郡に位置する。百濟の扶余宮城南部の一寺院で、538年に創建された。南北軸線上に塔、塔前方に中門、塔後方に中金堂と北講堂を置く基本配置をとる。金堂の位置が次第に伽藍の中心に近づいているのに対し、塔は明らかに前方(南)に寄っており、中心的位置から離れ始めている。これは塔と仏殿の位置づけに大きな変化が生じ始めたことを示しており、一連の変遷における新たな一段階をあらわしている。

奈良飛鳥寺は588年の創建で、1954年から1956年にかけて発掘された。南北軸線上に塔、塔前方(南)に中門と南門、塔後方(北)に中金堂と北講堂がある。伽藍の中心が塔から仏殿へと次第に移っていく配置ではあるものの、塔の左右には依然として東西の金堂があり、部分的に塔の中心的位置が保たれていることを示す。

大阪四天王寺(図五)は593年に創建された。南門、中門、塔、金堂、講堂が伽藍の中軸線上に位置する当該段階の特徴をとどめるが、塔は前方へと移動し、伽藍の中心が徐々に

塔から仏殿へと移っている。

奈良川原寺および法隆寺（図六）は、それぞれ655年、607年（法隆寺に現存する地上建築とその配置は670年の火災後の再建）に建立された。両寺院の伽藍配置における大きな変化は、塔が伽藍の中門より内側の前院に位置し、かつ西金堂と塔とが東西に並立していることである。塔は伽藍配置の南北中軸線からはずれない一方、中金堂が伽藍の中心に位置するようになり、中門から中金堂、そして講堂に直接至る南北の軸線が形成された。塔の位置づけがさらに低くなるのに対して、仏殿はすでに伽藍の中心的な位置を占めつつある。これは、東アジアにおける寺院の伽藍配置の変遷のなかでまた一つの重要な段階をなしており、塔と仏殿の位置づけの変化が顕在化する段階でもある。

奈良薬師寺は697年に創建された。塔は双塔で、かつ中門内側の前院の両脇に移動している。塔は伽藍のなかであきらかに付随的な位置にある一方、仏殿は完全に中心的地位を占めており、塔と仏殿が逆転する配置が基本的な完成をみた。

奈良東大寺は745年の創建で、仏殿が寺院の中心建築である。双塔もあるが、双塔は中門の外側、南大門の内側へと移動し、別に東西の塔院が建てられた。これも塔と仏殿との位置づけの変化の延長線上にある。

以上の諸例によって示した朝鮮半島と日本列島における寺院の伽藍配置の変遷は、以下のように明確に分けることができる。5世紀後半から6世紀初め（塔は中心付近、仏殿は北にある）、6世紀中頃から6世紀末（塔は中心を離れ前方に移動する）、7世紀中頃から7世紀後半（塔と仏殿が東西に並立する）、7世紀末およびそれ以降（東西双塔となって伽藍の外側へと移り、別に塔院を建てる）の計4段階である。これをもとに、朝陽北塔、大同思遠仏寺、そして洛陽永寧寺といった中国北方の三寺を時系列に並べるならば、東アジア仏教寺院におけるより系統的な伽藍配置変遷図を導き出せる。4段階に分けられることには変わりはないが、第1段階に中国北方の三寺が含まれることによって内容はより充実する。それだけではなく、塔が伽藍の中心付近から仏殿との並立へと変化し、さらに仏殿が徐々に中心に近づくことで塔の位置づけが従属的なものとなり、さらには伽藍の外側の塔院内へと移動するという変化の方向性もより明確になる。また、第1段階の仏教寺院は5世紀後半期まで遡り、地域も中国の北方に始まり、中国東北部を経て東北アジア地域へと発展する。この一連の変遷が反映しているのは礼拝対象の変化、すなわち、塔を主たる礼拝対象とすることから、仏殿と仏像の礼拝を主とすることへの変化である。それゆえ、この一連の変化は仏教が中国および東北アジア地域に伝播して以降の、きわめて重要な段階的变化とみなすことができる。これは、東アジア仏教における仏教の東漸という重大な問題に関わっているのである。

永寧寺の伽藍配置の発掘成果が有する学術的価値と多大な影響を評価するにあたり、そ

の発掘報告書は、同寺の伽藍配置が東アジア仏教寺院の伽藍配置の変遷のなかで占める位置や、仏教の東漸のなかで及ぼした重要な作用に言及した。「視野を世界に広げるならば、朝鮮半島と日本列島の初期仏教寺院遺跡にも、永寧寺のような伽藍配置の影響を認めることができる」⁽⁹⁾。

中国大陸から朝鮮半島および日本列島への仏教の伝播に関して、一般には南北の両路に分けられると考えられている。南路の論証が比較的多くみられるのに対し、北路はやや少ない。北路経由の仏教東漸の証拠として、初期の実例である朝陽北塔のほかにも、時期的に先行するが、北燕馮素弗墓からは仏像文を有する金製歩揺冠装飾が出土し、その年代は5世紀前半に位置づけられる⁽¹⁰⁾。義県万仏堂石窟に現存する大仏と日本の奈良飛鳥寺の大仏は作風が類似し、しばしば両者の関連性を認める根拠としても挙げられるが、時期はすでに6世紀以降である⁽¹¹⁾。また文献によれば、仏教が高句麗に伝わったのは4世紀後半である(372年の「秦王苻堅遣使及浮屠順道、送仏像經文」を高句麗への仏教の伝播とする)。しかし、両晋の境に位置づけられる遼陽上王家の壁画墓には、仏教の装飾モチーフである蓮華が確認できる。同墓前室の四壁は四枚の板石を角をずらしながら積み重ねて築き、方形天井をもつ墓室頂部を形成している。同墓の年代は、墓室頂部の構造が同一かつ壁画の内容が類似することから、朝鮮民主主義人民共和国の黄海南道安岳郡安岳3号墓(357年)を基準として、おおよそ4世紀中頃に位置づけることができる。これは文献にみられる高句麗への仏教伝播よりも数十年早い⁽¹²⁾。また、安岳3号墓にみられる石を互い違いに交差させる三角持送り式の墓室頂部と、そこに彩色で描かれた蓮華座や蓮華、蓮葉のような縁文様といった多くの蓮華装飾は、現在のところ高句麗への仏教伝播を示すもっとも古い証拠である⁽¹³⁾。両晋の境に位置する遼陽上王家壁画墓から安岳3号墓に至る仏教モチーフは、まさに最初期の仏教東漸の手がかりである。

以上論じてきたことからいえるのは、仏教の東漸には確かに北路を経由した一支流があったということである。具体的なルートとしては、遼西・遼東を経て高句麗に至り、そこからさらに南方へ伝播する。仏教寺院の伽藍配置における塔と仏殿の位置の変化は礼拝対象の変化を反映しており、その時期的な変遷は系統的であることから、北路は仏教の東漸過程のひとつの主要なルートであったと考えられよう。朝陽北塔はこのような伽藍配置の系統的な変遷のなかで最初期に位置しており、北路経由で東漸した仏教の重要な糸口であり、その実証である。宿白先生が言うように、「遼寧朝陽で発見された5世紀後半に創建された思燕仏図は、現在のところ高句麗と距離的にもっとも近い、塔を中心とした寺院である。」⁽¹⁴⁾。東北アジア仏教寺院の伽藍配置の変遷は、仏教の東漸過程において鍵となるものであり、朝陽北塔はもっとも高い学術的価値を有するもののひとつといえる。

(原文は『遼寧省博物館館刊』第3輯、2009年に掲載)

註

- (1) 網干善教『飛鳥発掘—成果と展望—』駸々堂出版、1988年。
- (2) 徐萃芳「開封大相国寺図説」『文物與考古論集』357～369頁、文物出版社、1987年。
- (3) 郭大順「古建筑維修的一個薄弱環節」『中国文物報』1996年。
- (4) 朝陽市北塔考古勘察隊ほか「朝陽北塔1986—1989年考古勘察紀要」『遼海文物學刊』1990年第2期。
張劍波ほか「朝陽北塔的結構勘察與修建歷史」『文物』1992年第7期。
- (5) 遼寧省文物考古研究所・朝陽市北塔博物館編：『朝陽北塔—考古發掘與維修工程報告—』133頁、文物出版社、2007年。
- (6) 中国社会科学院考古研究所『北魏洛陽永寧寺—1979—1994年考古發掘報告—』138頁、中国大百科全書出版社、1996年。
- (7) 大同市博物館「大同北魏方山思遠仏寺遺址發掘報告」『文物』2007年第4期。
- (8) 寺院の伽藍配置平面図は以下を参照した。
網干善教『飛鳥発掘—成果と展望—』111～114頁、駸々堂出版、1988年。
徐萃芳「開封大相国寺図説」『文物與考古論集』365頁の図5・6、367頁の図9、文物出版社、1987年。
- (9) 同註(6)、155頁。
- (10) 黎瑤渤「遼寧北票県西官営子北燕馮素弗墓」『文物』1973年第3期。
- (11) 劉建華『義県万仏堂石窟』科学出版社、2001年。
- (12) 李慶發「遼陽上王家晋代壁画墓清理簡報」『文物』1959年第7期。
洪晴玉「關於冬寿墓的發現和研究」『考古』1959年第1期。
- (13) 宿白「朝鮮安岳所發現的冬寿墓」『文物參考資料』1952年第1期。
- (14) 宿白「在“渤海文化検討会”上的發言」『北方文物』1997年第1期。